

平城宮跡発掘調査第153次現地説明会資料

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

1983年12月24日

当調査部では、従来から推定第二次大極殿地域の発掘調査を進めている。今回は、大極殿（第113次）、大極殿後殿（第132次）、大極殿閤門（第152次）、大極殿院東外郭（第35・73次）の各発掘区にはさまれる、東回廊を中心とする地域を対象として発掘調査（第153次）を実施した。この地域においては、1955年に平城宮跡第1次発掘調査がおこなわれ、大極殿回廊の東南隅およびそこから東へのびる築地の存在を確認している（平城宮発掘調査報告Ⅰ，1961）。今回はその第1次発掘区を含みこれら一連の発掘区を連続させて大極殿地域での各調査成果を総合する目的をもっておこなった。発掘面積は約3900㎡である。検出遺構は大別して古墳時代、奈良時代、平安時代の遺構にわけられ、調査は現在なお継続中である。

***古墳時代の遺構** 平城宮造営によって削平された前方後円墳（神明野古墳SX0249）があり、発掘区内で前方部東南隅を検出した。

***奈良時代の遺構** おおきく奈良時代前半と後半にわけられる。

〔奈良時代前半〕 大極殿閤門下層の門（SB11210）の棟通り柱筋から掘立柱の扉が約3.0m（10尺）の間隔で東にのび、発掘区外におよぶ。この扉には、北から二条の扉（SA10048、SA7593A・B）がとりつく。また、東朝集殿地域の調査（第48次）では東面築地の下層に掘立柱の南北扉が部分的に検出されているので、上層の築地と同様に下層の扉もここまで続く可能性がある。この時期の建物にはSB16、17があり、重複関係から建てかえがあったことがわかる。

〔奈良時代後半〕 推定第二次大極殿および十二堂院が造営され、大極殿を区画する東回廊（SC0102）と南回廊（SC0101）が造られる。その東南隅から十二堂院を区画する北面築地（SA0103）が東にのびる。

回廊は桁行約3.9m（13尺）、梁行約3.0m（10尺）の等間、礎石建ちで、棟通りには幅約50cmの凝灰岩切石を据えた痕跡が残る。これは棟通りに設けた閉塞施設の地覆石の痕跡である。また側柱筋と雨落溝との間に凝灰岩を敷いている。回廊には東南隅で、南北約7.0m、東西約3.0mの小室を設けていることがあきらかになった。なお回廊礎石等は長岡灘都に際してほとんど抜きとられた。

築地（SA0103）には寄柱礎石と基壇南面地覆石の一部が残っている。寄柱は桁行2.6m前後、梁行約1.5m（5尺）あり、礎石は方形の凝灰岩で上面には方形の枅穴をあけている。築地には十二堂院から大極殿院東外郭へ通じる門がひらく。

築地背面の雨落溝（SD07A・B）は素掘りで、この門の背後の部分にのみ凝灰岩切石による暗渠（SX08）を設けている。さらに、この築地には十二堂院を区画する東面築地がとりつくことが判明した。

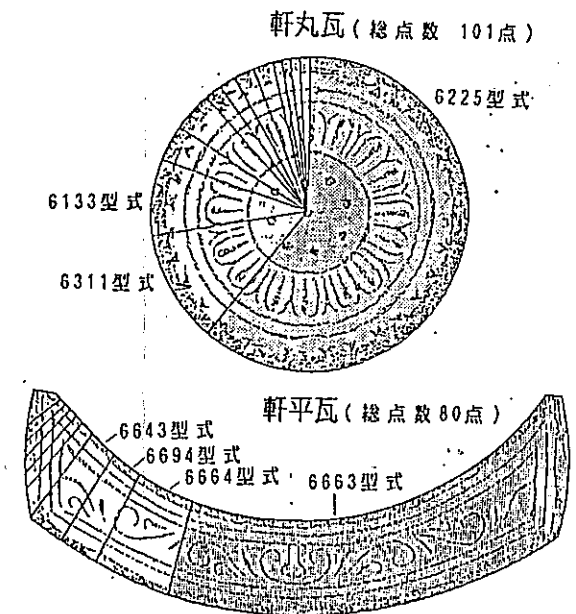
なお、今回の調査で、大極殿の東にある南北棟建物（SB10034）は桁行5間、梁行4間で東西両庇をもつこと、回廊の南にある南北棟建物（SB11201）は梁行2間で桁行5間以上におよぶことが判明した。このほか、大極殿の前面から東へのびる東西扉（SA11220）が東回廊にとりつくこともあきらかになった。

***平安時代以降の遺構** 主な遺構には建物10棟があり、とりわけ東回廊位置にある東西棟建物（SB20）は桁行5間、梁行3間の南庇付で、内部に間仕切りをもつ。このほか、発掘区東南部には妻通りをそろえた2棟の桁行3間、梁行2間の東西棟建物（SB03、05）等がある。

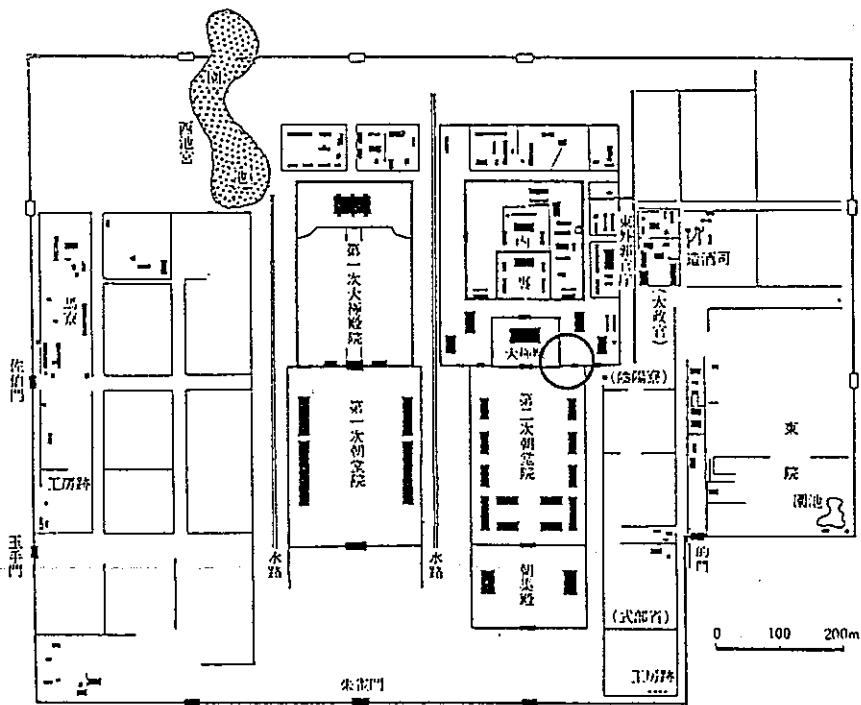
<まとめ>

今回の調査により推定第二次大極殿院およびその東外郭ならびに十二堂院にまたがる地域の遺構をあきらかにすることができた。要点は以下のとおりである。

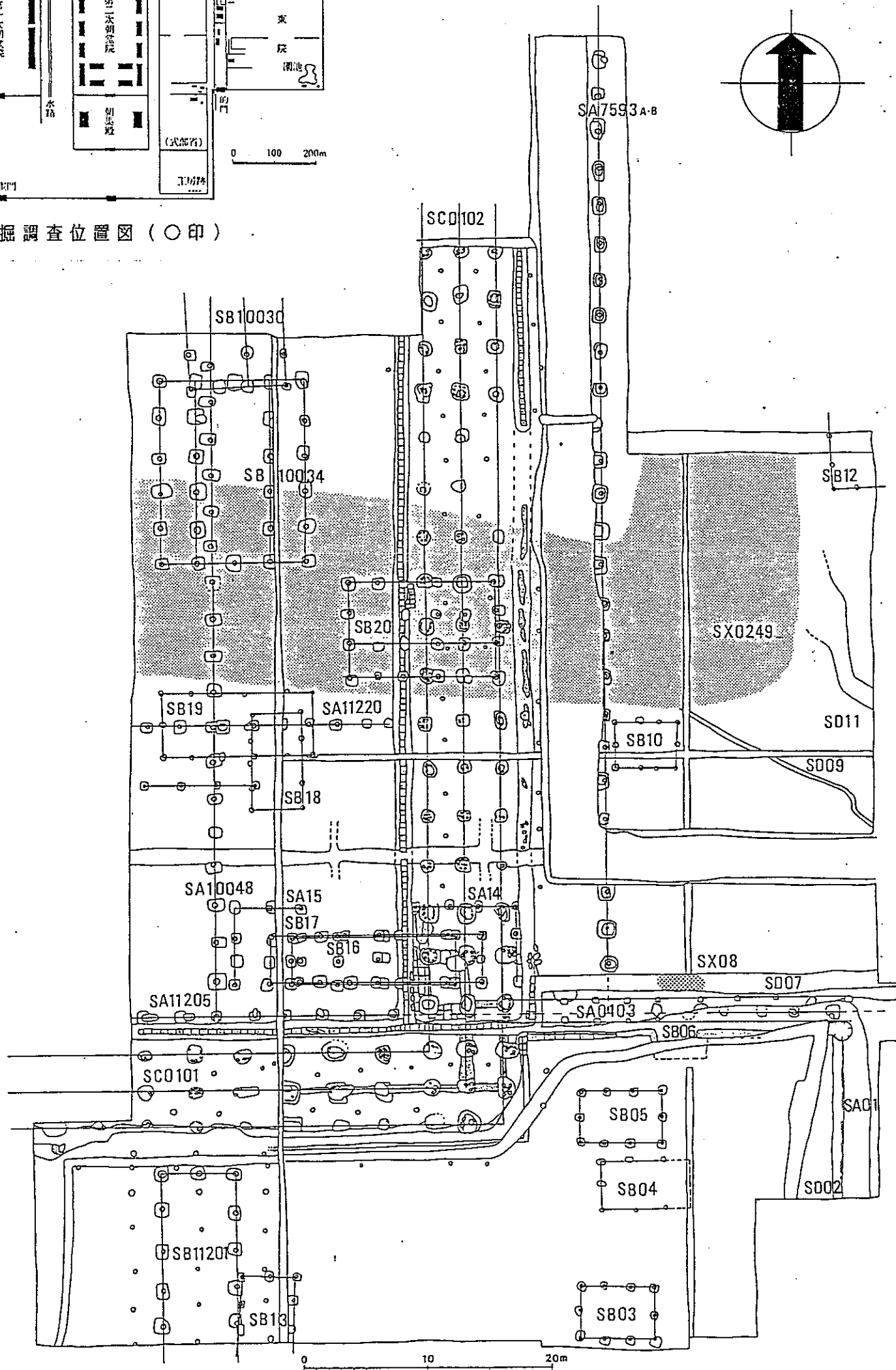
- ・神明野古墳の東南隅を検出し古墳の規模をあきらかにした。
- ・東回廊の全容をあきらかにすることができた。
- ・十二堂院と大極殿院東外郭とを区画する北面築地に設けた門を検出した。
- ・十二堂院を区画する東面築地の存在をあきらかにした。
- ・十二堂院内に十二堂以外の建物を検出した。
- ・平城上皇の時期以降におけるこの地域の土地利用の一端があきらかになった。



軒瓦の出土比率

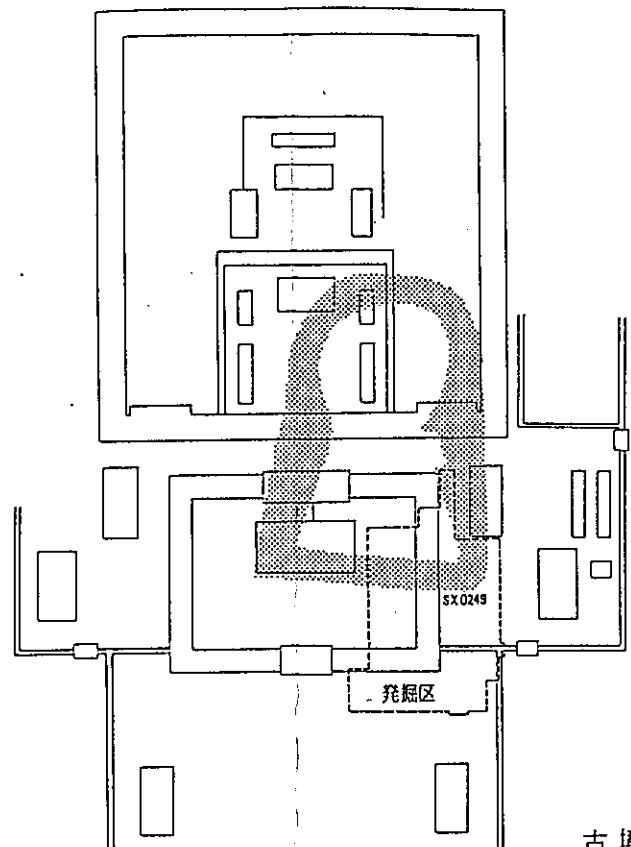
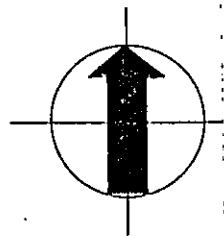


平城宮第153次発掘調査位置図 (○印)

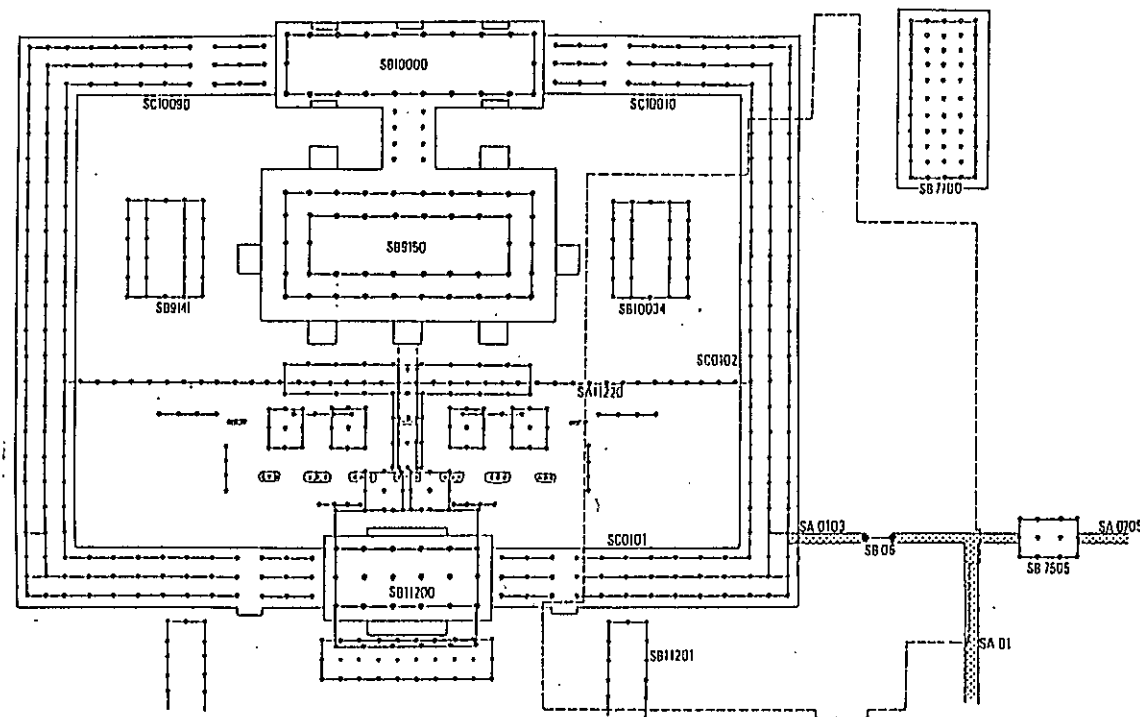


平城宮第153次発掘調査構図

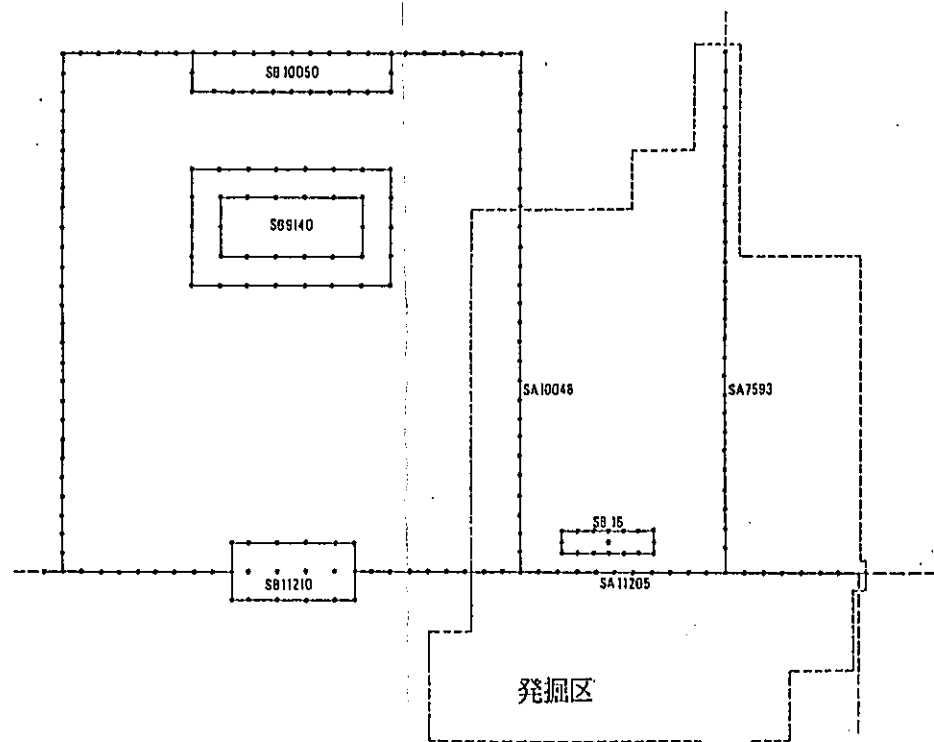
遺構変遷図



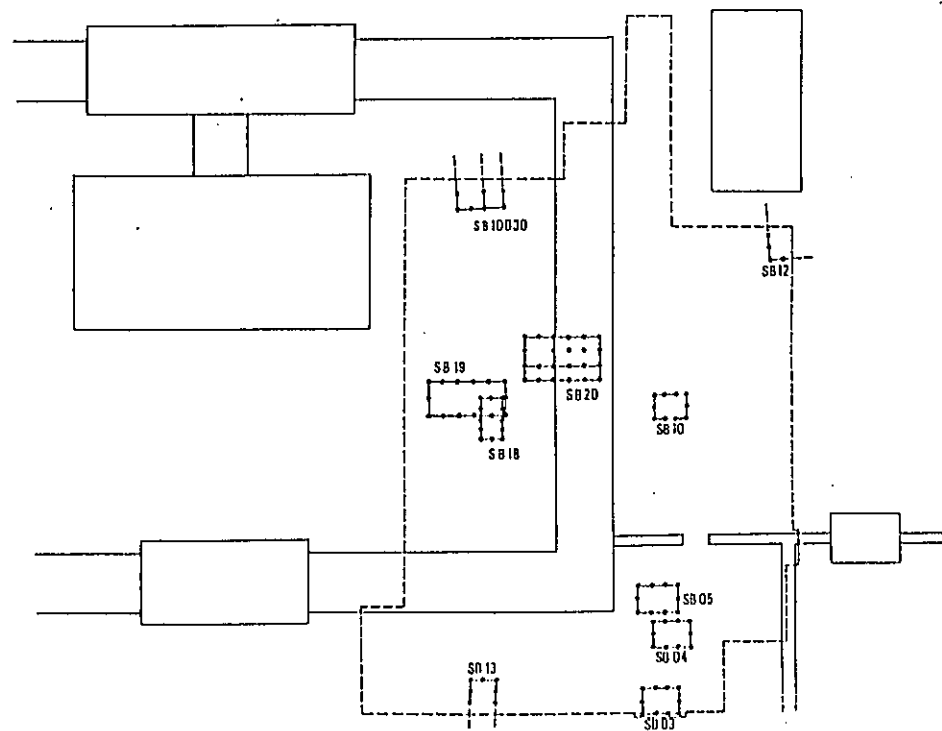
古墳時代の遺構



奈良時代後半の遺構



奈良時代前半の遺構



平安時代以降の遺構